

氏名	鄭 栄 愛	
学位の種類	博士（日本文学）	
学位記番号	博甲第 82 号	
学位授与年月日	2011 年 3 月 18 日	
審査研究科	文学研究科	
論文題目	日本語の配慮表現について —会話文における「けど」「ちょっと」を中心に—	
論文審査委員会	(主査) 大東文化大学講師 富 樫 純 一 (副査) 大東文化大学教授 池 山 晃 (副査) 大東文化大学教授 山 口 敦 史 (副査) 大東文化大学名誉教授 市 井 外 喜 子	

鄭 栄愛 博士学位論文 審査報告書

1. 申請者履歴

鄭栄愛氏は、2003年7月に中国・通化師範学院漢語言文学専攻を卒業後、ケーシーピーインターナショナル語学研修院で基礎的な日本語能力を身に付け（2003年7月～2005年3月）、2005年4月から一年間、大東文化大学大学院外国語学研究科日本語学専攻で研究生として学んだ。その後、2006年4月に大東文化大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程に入学し、2008年3月に同課程を修了した。同年4月に大東文化大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程に入学し、現在在籍中である。

鄭栄愛氏は、修士課程までは現代日本語の文法、主に名詞句の構造を中心に研究してきたが、文学研究科日本文学専攻博士課程後期課程に入学以降は、語用論的観点から対人的な配慮に関わる表現の分析に取り組み、多くの成果を上げている。博士学位論文「日本語の配慮表現について—会話文における「けど」と「ちょっと」を中心に—」（以下、本論文と呼ぶ）に関わる研究論文として、以下のものが挙げられる。

- 「前置きの「けど（けれども）」の配慮表現について」『研究会報告』28，日本語文法研究会，2009
- 「会話文における「……けど」の前置きの配慮表現について」『日本文学研究』49，大東文化大学日本文学会，2010
- 「「……けど」の言い出しの配慮表現について」『日本文学論集』34，大東文化大学大学院日本文学専攻院生会，2010

「会話文に見られる終助詞化した「……けど」の配慮表現について」『研究会報告』29, 日本語文法研究会, 2010

「会話文における「ちょっと」の配慮表現について(1)」『対照言語学研究』20, 海山文化研究所, 2010

「「けど」の順接的な配慮表現について」『日本文学研究』50, 大東文化大学日本文学会, 2011

「会話文における接続詞的「けど」の配慮表現について」『研究会報告』30, 日本語文法研究会, 2011(3月刊行予定)

「会話文における「ちょっと」の配慮表現について(2)」『日本文学論集』35, 大東文化大学大学院日本文学専攻院生会, 2011(3月刊行予定)

以上のような研究業績を基礎として、本論文を執筆し、提出するに至った。

2. 論文の要旨・構成および特色

本論文は、現代日本語の「けど」(「けれども」「けど」を含む) および「ちょっと」の二形式を、配慮という観点から詳細に分析したものである。以下に論文の目次を示す(一部、細かい節タイトルは省略した)。

序章 問題提起、目的、考察方法及び全体構成

1. 問題提起
2. 本論文の目的
3. 本論文の考察方法
4. 本論文の全体構成

第一章 先行研究概観

1. ポライトネス理論概観
 - 1.1. Leech(1983)のポライトネスの原則
 - 1.2. Brown&Levinson(1987)のポライトネス理論
2. 日本におけるポライトネス理論の紹介
3. 日本語の配慮表現研究の現状
 - 3.1. 山岡(2005)、(2010)
 - 3.2. 彭(2005)
4. 「けど」の先行研究
 - 4.1. 「けど」の用法について
 - 4.2. 「けど」の配慮表現の先行研究
5. 「ちょっと」の先行研究
 - 5.1. 「ちょっと」の用法について
 - 5.2. 「ちょっと」の配慮表現の先行研究
6. 先行研究まとめ
 - 6.1. 先行研究の問題点

- 6.2. 「けど」「ちょっと」のポライトネス・ストラテジー
- 6.3. 本論文の解釈及び用語設定

第二章 会話文における「けど」の配慮表現について

1. はじめに
2. 接続助詞「けど」の配慮表現について
 - 2.1. 「けど」の前置きの配慮表現
 - 2.2. 「けど」の言い出しの配慮表現
 - 2.3. 「けど」の順接的な配慮表現
 - 2.4. 「名乗り+けど」の配慮表現
 - 2.5. 挿入的な用法の配慮表現
 - 2.6. 「～けど、感情表現」の配慮表現
3. 文末に用いられる「けど」の配慮表現について
 - 3.1. はじめに
 - 3.2. 先行研究
 - 3.3. 文末に用いられる「けど」の配慮表現
 - 3.4. 文末に用いられる「けど」の配慮表現のまとめ
4. 接続詞的「けど」の配慮表現について
 - 4.1. はじめに
 - 4.2. 接続詞「けど」の配慮表現
 - 4.3. 接続詞的「けど」の配慮表現のまとめ

第三章 会話文における「ちょっと」の配慮表現について

1. はじめに
2. 先行研究
3. 「ちょっと」の配慮表現
 - 3.1. 「ちょっと」の基本的用法
 - 3.2. 慣用的な用法
 - 3.3. 感嘆詞的な用法—「ちょっと」一言を用いる場合
 - 3.4. 文末に用いられる時

第四章 配慮表現の立場からの「けど」「ちょっと」の用法の考察

1. はじめに
2. 「けど」の用法について
3. 「ちょっと」の用法について
4. 「けど」「ちょっと」の関連性
 - 4.1. 「けど」「ちょっと」の共通点
 - 4.2. 「けど」「ちょっと」の相違点
 - 4.3. 配慮表現としての「けど」「ちょっと」の位置づけ

第五章 日本語教育における「けど」と「ちょっと」

1. はじめに
2. 日本語教育について
3. 各教科書に導入される「けど」と「ちょっと」の文型
4. 日本語教師用の参考書による「けど」と「ちょっと」

5. 各教科書に扱われる「けど」「ちょっと」の文例
6. まとめ

終章 本論文のまとめ

参考文献一覧
用例出典一覧

以上の目次一覧から明らかなように、「けど」と「ちょっと」という二つの異なる形式に注目し、これらが配慮という枠内において同じような働き・機能を持ちうることを分析している。もちろん、配慮との関係を論じる以前の、意味論的・構文論的な観点に立った研究（いわゆる接続助詞としての「けど」および程度副詞としての「ちょっと」の分析）も踏まえており、それらの意義を踏まえつつ、この二形式が配慮表現として語用論的にどう分析できるか検討している。また、考察の前提として、「けど」「ちょっと」の膨大な用例を収集しており、「けど」「ちょっと」が実際にどのように使用されるのかという、実状を把握する上でも貴重な資料的側面を有している。さらに、鄭氏は非日本語母語話者であり、その立場から日本語教育における「けど」「ちょっと」の教育・学習のあり方も問うている。

配慮表現という一つの枠組みで「けど」「ちょっと」を分析することで、配慮という対人的コミュニケーションの子細な分類の可能性にまで言及している。多角的・総合的な記述という点においても、今後の配慮表現研究の大きな礎となるといえる。

3. 論文の審査内容および評価

本論文の序章では、問題提起、研究の目的、考察方法などを示している。分析の出発点は、接続助詞「けど」および程度副詞「ちょっと」が、実際の会話においては基本的な意味から外れた使われ方がなされているところにある。

- (1)a 体調が悪いけど、学校に来た。
 - b この前の件ですけど、どうなりましたか？
- (2)a 水の量がちょっと多いよ。
 - b ちょっとすみません。

接続助詞「けど（けれども）」の基本的な意味は逆接である。したがって(1a)のような用法が基本となる（「体調が悪いなら学校に来ないはずだが実際は来た」）。しかし、(1b)のような用法が実際の会話には散見される。(1b)を逆接として解釈することは困難である。

程度副詞「ちょっと」は基本的な意味として「程度量がわずかである」ことを示す。(2a)のよ

うな用法であり、「水の量の多さ」がどの程度なのかを「ちょっと」で補足するのである。しかし「ちょっと」においても(2b)のように、基本的な意味では解釈できない用法が認められる。(2b)は「すみません」という謝罪の程度の多寡を示しているわけではない。

このような用法は、従来から「何らかの配慮を示すもの」として扱われてきたが、その内実に目を向けている研究は少ない。鄭氏はその点に着目し、問題提起とした。

序章では、会話文で用いられる「けど」と「ちょっと」について、上記の問題を立脚点としつつ、次の四つを議論すべきものとして提起している。

1. 会話文における「けど」の用法を明らかにする。
2. 会話文における「ちょっと」の用法を明らかにする。
3. 日本語学習者が「けど」「ちょっと」を学習する際に、現時点の日本語教科書と指導書にどのように影響されているのかを探る。
4. 「けど」と「ちょっと」の共通点・相違点から、日本語の配慮表現の全体像の中で、「けど」と「ちょっと」を位置づける。

第一章では、本論文の根幹をなす概念である配慮表現について、先行研究を踏まえて概念規定を試みている。ブラウン&レビンソン (Brown & Levinson) のポライトネス理論を土台とし、配慮表現をポライトネス・ストラテジーの一種として位置づける。ポライトネス・ストラテジーの中でも特に「相手の面子を脅かさない」ための行為である、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーと捉える。このような観点に基づき、配慮表現を次の四種に分類している。

- ・「聞き手への配慮」：なるべく相手の負担を少なめにする言語行動を指す。
- ・「自分への配慮」：相手より、自分のために用いる言語行動を指す。
- ・「配慮なし」：相手を傷つけるような不満、非難などのマイナス感情を指す。
- ・「会話の場への配慮」：「聞き手への配慮」「自分への配慮」ではなく、会話がスムーズに流れるためという、いわゆる「会話の展開」と関わりがあるもの。

配慮といえば従来は、すなわち聞き手に対するものと捉えられてきた。しかし、そこに新たに「自分(話し手)」や「会話の場」という項目を設けることで、配慮というものの有り様を包括的に規定しようとする意図が見て取れる。このような従来理論と異なる方向での再規定は、論理的妥当性および説明的妥当性に必ずしも優れているとは言えないものの、配慮表現分析の今後のあり方に一石を投じるものであるといえるだろう。

また、第一章では「けど」「ちょっと」の先行研究を概観し、研究史的な整理も行っている。

以上、序章および第一章では、考察の基礎となる問題設定そして研究史の概観を緻密に行っている。また、配慮表現という概念の規定も先行理論を踏まえた上で独自の観点から試みている。本論文において配慮表現は「けど」「ちょっと」の分析手段の一つという位置が与えられているが、配慮表現そのものへのより根源的な議論の指標ともなるべきものであるといえる。

本論文第二章以降は、第二章で「けど」の分析、第三章で「ちょっと」の分析、第四章で「けど」と「ちょっと」の関連性、第五章で日本語教育の観点からの考察を行っている。

第二章は「けど」の分析である。配慮表現として用いられる「けど」を、接続助詞「けど」・文末に用いられる「けど」・接続詞的「けど」の三種に分けて考察している。主として、「けど」の現れる位置、前件と後件の意味関係に基づいて、配慮表現の「けど」にどのような用法が存在するのかを確認している。「けど」節が主節の内容と密接に関わるかどうかによって、a)前置き、b)言い出し、c)順接的、と区別した。従来の研究において逆接を表さない「けど」は、単に「逆接でない」という捉え方しかなされておらず、逆接でなければ一体何なのかという点には踏み込んでいなかった。しかし、ここでは厳密な分類基準により、前置き、言い出し、順接的という新たな区分を示すことができおり、配慮表現の「けど」の多様性を指摘している。

また、「名乗り+けど」という表現の存在も分析している。日常会話の中でよく用いられる「私だけ」と名乗るような表現がそうであるが、従来ほとんど分析されてこなかった。豊富な用例から名乗りのパターンを網羅し、それらが配慮表現に基づいたものであることを明らかにしている。「けど」の包括的な分析をすることで初めて得られる結論であり、非常に示唆に富んだ指摘となっている。

第二章では他に文末の「けど」についても詳細に分析している。文末の「けど」はいわゆる言いさし表現であるが、言いさすことによってどのような働きを聞き手に与えるかという観点から分類を試みている。また、接続助詞「けど」の派生形として、接続詞的に用いられている「けど」について、逆接の機能ではなく話題の転換としての機能が認められることを指摘している。この場合、会話の場への配慮となるのであるが、逆接が転換という意味に変化するという指摘は重要であり、今後の分析に新たな方向性を与えるものである。

第三章は「ちょっと」の分析である。配慮表現としての「ちょっと」を、基本的な用法・慣用的な用法・感嘆詞的な用法・文末の四種に分けている。いずれも程度副詞の意味を表さないことから配慮表現と位置づけられる。考察方法は第二章と同様であり、それぞれの用法がどのような配慮を示すのかを、用例に基づいて丁寧に考察している。結果、「ちょっと」にも「けど」と同様に、聞き手への配慮、自分への配慮、会話の場への配慮といった、さまざまな配慮が存在していることが確認された。配慮表現としての「ちょっと」は、先行研究において緩和・和らげの機能があると指摘されている。しかし、ここで明らかにしたのは、配慮という観点からの分類可能性

であり、「ちょっと」の意味分析の視野を広げるものであるといえる。

特に注目すべきは、慣用的な用法で示されている「ちょっとすみません」という形式である。明確に配慮表現と分かるものであるが、これは呼びかけという働きしか持たない。「すみません」が本来持つ謝罪という意味が失われているのである。これも配慮表現「ちょっと」による意味の変化といえることができるだろう。配慮によって形式の意味が変わってくるのである。

感嘆詞的な用法および文末の二種については、分類基準が厳密になっておらず、基本的な用法や慣用的な用法として解釈することも可能となっている。この点に関しては分析が不十分であり、今後より明晰な議論が必要となるといえる。

第四章は、ここまでの「けど」「ちょっと」の配慮表現としての分析を踏まえて、「けど」と「ちょっと」の類似点と相違点について考察している。また、各用法の用例数を示し、どの用法の割合が多いのかという点も指摘している。「けど」「ちょっと」どちらも、聞き手への配慮を持つ用法の頻度が高いという結果が出ている。

第五章はこれまでとは見方を変え、日本語教育という観点から、「けど」「ちょっと」がどのように教えられているのかを検討している。非日本語母語話者にとって、本来の意味から外れた用法を理解するのは非常に困難である。現状の日本語教科書で「けど」や「ちょっと」がどのように扱われているかを分析した結果、本来の意味で使われているかどうか、配慮表現かどうかといった点で明確に区別されていないことが明らかとなった。その結果を踏まえ、配慮表現としての用法をより明確に提示していく必要があると指摘している。いわゆる文法的な分析と、実際の学習・教育との橋渡しを考えていく上で、本章の存在は貴重であり、評価すべきものであるといえる。

終章は、論文全体をまとめ、今後の課題・分析の方向性を述べている。

全体を通して見ると、配慮表現という対人コミュニケーションにおいて必須とも言える概念に基づいて、形式の振る舞いを観察したという点は非常に有益なものと認めることができる。しかも、全く異なる二種の形式においてそれを示したことは、配慮表現というもののあり方がアドホックな概念ではなく、言語行動（そしてそれを支える言語形式）全体に一つの柱となって浸透していることの大きな証拠となるといえるだろう。この点だけをとっても鄭氏の分析は価値のあるものである。

本論文の分析は、膨大な用例をつぶさに観察することで初めて到達することのできるものである。鄭氏の研究姿勢の賜物であるといえる。また、日本語教育と文法研究の接点を取り上げた点は、鄭氏自身が非日本語母語話者であることも大きく関わっていよう。文法と教育は切り離されて論じられることが常であったが、今後はこの二つの繋がりを重要視していくべきである。その

意味でも、本論文は評価に値する考察を行っているといえる。

もちろん、本論文における問題点は少なからずある。特に理論的観点からの配慮表現の概念規定は今後さらに詰めていかなければならないものであろう。このことは第五章の日本語教育にも関わってくるといえる。また、用例の解釈に若干の恣意性が残っている点、種々の用法における判断基準の曖昧性、といった点は、今後、深く掘り下げて検討していかなければならない。さらに、鄭氏自身も論文中で指摘しているが、本論文での用例は全てドラマシナリオから収集したものである。会話文というからには、やはり、実際の日常会話を録音収集して分析すべきであると思われる。しかし、これらの問題点は一朝一夕に解決できるものではない。鄭氏のライフワークとして、今後の成果が大いに期待される。

4. 結論

以上の審査内容、評価を総合的に勘案し、本論文を対象とする博士学位論文審査委員会は全員一致で、鄭栄愛氏が博士（日本文学）の学位を授与されるのに適格であると判断し、ここに報告する次第である。